近衛中学校　令和8年度前期学校評価アンケート
考察（全国学力調査生徒質問紙との比較から）

1，学校教育目標【自主自律そして自治】への到達度
「社会や人とのつながりを大切にし　可能性を最大限に探究する　たくましく生きる生徒」

Q，地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか（社会や人とのつながりを大切にする）

	当てはまる	だいたい当てはまる	計
全国	22	50	72
京都府	19	49	68
本校生徒	22	46	68

【考察】
本校の結果は京都府平均と同水準であるものの、全国と比較するとやや低い状況が見られた。一方で、本校では家庭科における高齢者理解や幼児とのふれあい活動、キャリア教育の一環として実施している「生き方探究チャレンジ体験」、地域行事への参加（節分祭、商店街パレード、祭礼）、地域住民との交流活動（ふれあいトーク）、京都大学関係者による講演など、多様な地域連携活動を継続的に実施している。さらに、人権学習では、障害者福祉施設の園長先生の講演と施設のイベントでの交流や、隣接する留学生寮の外国の方との交流で、多文化共生学習などを通して、社会とのつながりを実感できる機会も設けている。
今回の結果からは、これらの活動の意義を生徒自身が地域や社会への参画意識として十分に結び付けられていない可能性も考えられる。今後は、体験活動の振り返りや発信の機会を充実させ、地域や社会との関わりが自分自身の成長や社会貢献につながっていることを実感できる教育活動を推進していきたい。

Q.家で自分で計画を立てて勉強していますか（可能性を最大限に探究する）

	当てはまる	だいたい当てはまる	計
本校生徒	R7/26→26	R7/33→39	R7/59→64

Q.授業では課題解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいる（可能性を最大限に探究する）
（分からないことや知りたいことがあった時、自分で学び方を考え、工夫することができる。）

	当てはまる	だいたい当てはまる	計
全国	27	51	78
京都府	25	51	76
本校生徒	41	49	90

【考察】
本校生徒の肯定的回答は全国・京都府平均を大きく上回り、自ら考え主体的に学習に取り組む姿勢が身に付いていることがうかがえる。
その要因の一つとして、一昨年度から運用しているスケジュールノートの継続的な活用が考えられる。生徒は日常的に予定や課題を管理し、自ら情報を整理するとともに、仲間の工夫も参考にしながら計画的に学校生活を送っている。
今後もスケジュールノートを効果的に活用し、自己管理力や課題解決力をさらに高めるとともに、自ら学び続ける姿勢の育成を図っていきたい。

Q，難しいことでも，失敗を恐れないで挑戦している（たくましく生きる）

	当てはまる	だいたい当てはまる	計
本校生徒	R7/25→28	R7/51→49	R7/76→77
保護者	R7/15→38	R7/54→47	R7/69→85
教職員	R7/6→20	R7/56→50	R7/62→70

【考察】
生徒・保護者・教職員のいずれの結果も昨年度より向上しており、本校生徒が様々な場面で前向きに挑戦する姿勢を身に付けていることがうかがえる。特に保護者からの肯定的評価の伸びが大きく、学校での取組や成長の様子が家庭にも伝わっていると考えられる。
行事や日常の教育活動を通して、生徒一人ひとりが活躍できる機会を設けてきたことが、この結果につながったと考えられる。今後も挑戦する機会を意図的に増やし、達成感や自己有用感を味わう経験を積み重ねることで、失敗を恐れずに行動できる生徒の育成を目指していきたい。

Q，総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め、整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる。（他人と協力し探究し続ける）（生徒・教員）
Q，子どもは学校で学んだことを生かして、自分の考えをまとめたり思いや考えをもとに、新しいものを作りだしたりする活動を行っている。（保護者）

	当てはまる	だいたい当てはまる	計
全国	32	48	80
京都府	31	51	82
本校生徒	30	49	79
保護者	20	52	72
教職員	35	60	95

【考察】
本校では「近衛タイム」を中心に、3年間を見通した系統的な探究学習を実施している。また、上級生の探究活動発表を聞く機会を設けるなど、生徒同士が学び合える環境づくりにも取り組んでいる。
結果は全国・京都府平均をわずかに下回ったものの、生徒が自ら課題を設定し、情報を収集・分析して発信する力は着実に育まれていると考えられる。探究的な学びを通して、多面的な見方や考え方を身に付け、自らの将来や生き方を考える力の育成につながっている。
今後も学習内容や成果を検証しながら改善を重ね、生徒一人ひとりの探究的な学びをさらに充実させていきたい。

2，自己有用感について
（保護者、教職員アンケート含む）

Q，自分には良いところがあると思いますか（生徒）
Q，学校で子どもの自己肯定感は育まれている（保護者）
Q，生徒の自己肯定感を高めるように指導方や活動の場の提供など努力している（教職員）

	当てはまる	だいたい当てはまる	計
全国	41	43	84
京都府	40	44	84
本校生徒	50	37	87
保護者	34	53	84
教職員	50	45	95

【考察】
本項目は以前、全国平均を下回る状況が見られたが、小中連携（六校会）をはじめとする継続的な取組の成果もあり、現在は全国・京都府平均を上回る結果となった。
この結果は、日々の教育活動の中で教職員が生徒一人ひとりのよさを認め、達成感や自己有用感を育む指導を積み重ねてきた成果と考えられる。また、保護者からも高い評価を得ていることから、学校の取組に対する理解と信頼が広がっていることがうかがえる。
今後も生徒の成長や努力を積極的に認める指導を継続し、さらなる自己肯定感の向上につなげていきたい。

Q，わたしは将来の夢や目標を持っている（生徒）
Q，子どもは将来の夢や目標を持っている（保護者）
Q，生徒は将来の夢や希望を持っている（教職員）

	当てはまる	だいたい当てはまる	計
全国	37	30	67
京都府	34	30	64
本校生徒	41	25	66
保護者	33	44	77
教職員	20	60	80

【考察】
中学生は将来像を具体的に描くことが難しい発達段階にあるが、本校生徒の結果は全国・京都府平均とほぼ同水準であり、一定数の生徒が将来の夢や目標を持っていることが分かる。
この背景には、探究学習やキャリア教育、道徳教育、総合的な学習の時間などを通して、自分自身の生き方や将来について考える機会を継続的に設けてきたことがあると考えられる。また、保護者の評価が高いことから、家庭でも将来について話し合う機会が増えていることが推察される。
今後も学校と家庭が連携し、生徒が自分の可能性や将来の目標について主体的に考えられる機会を充実させていきたい。

3，ICTの使用について
（保護者、教職員アンケート含む）

Q，学習の中でコンピューターなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか（生徒）
Q，子どもはコンピューターなどのICT機器を学習に役立てている（保護者）
Q，生徒がコンピューターなどのICT機器を学習に役立つように授業で使用している（教職員）

	当てはまる	だいたい当てはまる	計
本校生徒	R7/58→56	R7/37→39	95→95
保護者	R7/22→28	R7/57→59	79→86
教職員	R6/31→25	R6/50→45	81→70

【考察】
ICT機器の活用は学校生活に定着し、生徒の学習を支える重要なツールとなっている。各教科での活用により、自分の考えを共有したり整理したりすることが容易になり、教員・生徒双方にとって学習の振り返りや評価にも効果的に活用されている。
一方で、保護者の評価が生徒より低い背景には、家庭でのスマートフォンやSNSの利用状況、ICT機器への依存等に対する不安があると考えられる。
今後もICTの効果的な活用を進めるとともに、情報モラル教育やメディアリテラシー教育を充実させ、安心・安全にICTを活用できる力の育成に努めていきたい。